

# 2003 スパルタスロン完走記

深水 滝夫

< 2003年 ギリシャ・アテネ >

## ■運動オンチがトライアスロンに目覚める

子供の頃、いつも徒競走はビリから二番目。鉄棒の逆上がり出来ない。跳び箱飛べない。まさに典型的な運動オンチでした。だから、いつもスポーツコンプレックスを持っていた。

その運動オンチが高校時代の水泳でスポーツに目覚めたものの選手としては三流選手。でもスポーツの充実感を体得し、社会人になっても水泳は継続。その影響で40歳の時、製鉄所の仕事からスイミングコーチの仕事へ転職が決まった。

44歳の頃、不本意ながら参加した駅伝大会で、長距離走が自分に向いていることに気付く。あと自転車が出来ればトライアスロンがやれるではないか…？と夢は膨らんでいった。そして、ついにトライアスロンにハマッてしまったのです。

しかし、思い通りにならないのが人生。2000年の宮古島トライアスロン55歳台で4位の成績を残したその年の11月、アクシデントが起きたのです。

自転車のロードレースで崖にぶつかり、肋骨7カ所、鎖骨・肩甲骨・鼻骨各1ヶ所骨折の大怪我。自転車の恐怖心と会社の仲間への迷惑を慮ってトライアスロンは一時中断を余儀なくされた。

## ■スパルタスロンに駆り立てたもの

幸い足は擦り傷程度で済んだためランニングは可能。でも、30回ほど完走したフルマラソンの感動は薄れ、10回ほど完走した100キロマラソンの感動も色あせてきた。しかし、遥か彼方に夢のスパルタスロンが私の頭の片隅に輝いていました。

59歳のおじさんには、残された人生そんなにたくさんない。時間はどんどん逃げていく。人生を自分の中に一瞬でも捕まえ、自分なりに人生の痕跡を残すには挑戦し続けるしかない。ヨシ！スパルタスロンに挑戦してみよう。完走すれば新たな感動と新しい何かが見えてくるはずだ。そして、ひとかけらでも人生を捕まえよう。不安を抱え、自信ないまま、今年の1月出場を決意、準備に取り掛かりました。

## ■手探りのスパルタスロン準備と練習

準備に入ったもののトレーニングの方法さえ判らない。また、周りに聞く人もいない。考えた末、インターネットでスパルタスロンの情報を徹底的に集めることにした。その中でドクターでありスパルタスロン 3 位の実績を持つウルトラランナーの小野木 淳先生著の「鉄人ドクターのウルトラマラソン記」と出会う。熟読するとスパルタスロンの全容とトレーニング方法の概要が見えてきた。でも、スパルタスロンはいままで走った100キロの2.5倍。不安がよぎる。迷っていても前に進まないの、取り敢えず国内の250キロレースに出て様子を見ることにした。

スパルタスロンのステップとして選んだのが、5月の連休に山口県で開催される「萩往還マラニック」。

これは250キロを48時間以内で走るレース。45時間弱で辛うじて完走。完走できなければスパルタスロンはやめようと考えていた。これで何とか走れる自信はついた。しかし、スパルタスロンは距離はほぼ同じを36時間以内と言う厳しい制限時間があるのだ。単純に萩往還マラニックより約10時間早く走らないと完走できない。また、新たな不安が噴出。

トレーニングに悔いだけは残したくないので、7.8月は月間600キロのノルマを自分に課すことにした。

そして走った。雨の日も、台風の日も…。休みを利用して50～60キロ走も数回やった。幸い足腰の障害は、発生しなかったが8月上旬には疲れがピークに達し、クラブの練習会ではキロ7分でみんなについていくのがやっとだった。

## ■過酷なスパルタスロンとその歴史

紀元前500年古代ギリシャに両雄として君臨していたのはアテネとスパルタ。マラトンの戦いにペルシャ軍の脅威に晒され劣勢に立っていたアテネ軍の司令官はスパルタの援軍を求め伝令を走らせた。その男フィディピデスは走り続け、アテネを出た翌日スパルタに到着したという。

ヘロトドスの叙述を実証するため、ウルトラランナーでもある英国空軍中佐ジョン・フォーデンは、実際にフィディピデスの辿ったルートを忠実に走り36時間以内にスパルタのレオニダス王の銅像前に到着し、ヘロトドスの叙述が正しかったことを証明し、翌1983年には11カ国45人のランナーで第1回のスパルタスロンが開催された。

コースは、パルテノン神殿の下をスタートし、アテネ市内を通り抜け、エーゲ海沿いの海岸道を走り、コリントス運河を渡る。

ブドウ畑やオリーブ林を抜け、150キロ過ぎに最大の難関1,200mのサンガスの岩山がランナーの行く手を阻む。

約200キロで再び1,000mの山を越えてスパルタに入る。スパルタ市中央のレオニダス王銅像の足に触れてゴール。

気温は日中30℃以上に上がり、夜5℃まで下がる。これまでの完走率は30～40%。

## ■完走の可能性は？

萩往還マラニックのスタート前、偶然にも小野木先生と話す機会に恵まれ、「先生の本読みましたよ」と言うと直ぐお互いの距離が近づいた。「判らないことあったら E メールでどうぞ」と言われ最強の助っ人を得たような気がした。

9月はじめ完走への不安はピークに達した。

果たして萩往還マラニックより10時間も早く走れるのだろうか…？考えれば考えるほど不安に押し潰されそうになる。

小野木先生に聞いたら何か分かるかもしれない。早速、パソコンに向かう。

質問の主意は、59歳と言う年齢を含めた完走の可能性である。4月からの月間練習量、体重、体脂肪、フル・ウルトラマラソン過去の実績データを添えてEメールを送る。

翌日、飛び上がるほどうれしい返事。なんと、完走の可能性大だと…。半信半疑で繰り返し読み返す。間違いなく完走の可能性大と書いてある。一挙に不安が半減。

更に、貧血と肝機能の血液検査をしてその結果を見せるよう指示があり、直ぐに病院に走る。

良性のコレステロールが若干高い他は、貧血も肝機能も異常なしの判定が出て、先生から「自己管理が良い結果だ」と褒められ、少しお尻がむず痒かった。

その他、ペース配分、胃腸のコントロール方法、睡魔の対処方法などなど医学的な見地からも貴重なアドバイスを受けた。

年齢的な問題は、日本の最も暑い7・8月に月間600キロの距離をこなして体調に異常がないので心配無用だと言う。



## ■いざ、夢のスパルタスロンへ

早朝 3 時半起床。

サポートクルーが日本から炊飯ジャーを持ち込んで炊いてくれたオニギリと味噌汁を頂く。  
日本人、やはり戦いの前はこれだ！

メトロポリタンホテルを 4 時半バスで出発、スタート地点のアクロポリスに向かう。  
到着して一番初めに迎えてくれたのが数匹の大型犬。首輪をしていないので多分野良犬だろう。でも、日本の野良犬と違って人懐こい。スパルタスロン常連の方の話では、過去に 50 キロぐらいまでこの犬が着いてきたことがあるらしい。

スタート地点はパルテノン神殿の下。まだ、暗い。世界のウルトラランナーが続々結集する。  
9 月はじめまで、あれだけがき苦しんだ不安は嘘のように消え、今、世界のウルトラランナーと肩を並べスタートラインに立てる喜びに浸っている。

大会役員が来てスタートラインを指示する。それが二転三転する。そして、もう時計は予定の 7 時を過ぎているのに、まだスタートしない。  
やっと、7 時 3 分スタートの号砲が鳴り、選手はパルテノン神殿の坂をゆっくり下って行く。不思議と緊張感はない。

ホテルが同室で今回三回目のチャレンジの境さんと完走を誓いスタートするが、別大マラソン完走の実績を持つスピードランナーの彼の背中アツという間に私の視界から消えていった。

それにしても、スタート地点の変更や時間の遅延は、いかにもギリシャ人のおおらかな国民性を表している。

## ■ 走りにくいアテネ市街

早朝なのでまだ車の往来は少ないが、歩道は車の駐車に占有されている。

その中を選手は縫うようにして走る。走りにくい。要所の交差点では警察官が車を止めて誘導してくれるが、待たされる車からはブーイングのクラクションが鳴る。

1時間ほど走るとアテネの郊外に出て歩道はなくなり、道路は出勤の車で混雑しはじめ、路側帯を一つ列になって走る。

完走の最大ポイントは「コリントス (81 キロ) までは、物足りないくらい徹底して抑えることだ」と言う小野木先生のアドバイスを思い出し、キロ 6 分ぐらいに抑える。

## ■ 紺碧のエーゲ海を見ながらコリントスへ

約 20 キロで左手に憧れのエーゲ海が見え始める。

概ね 3 キロ間隔で設置され、水、ジュース、パン、ビスケット、果物などが用意されているエイドステーションでは、必ず立ち寄ってこまめに給水、給食を取る。

湿度が低いこの季節のギリシャ、直射日光の下ではもちろん暑い。しかし、割とカラッとしており、汗も直ぐ蒸発するため発汗の感覚が少ない。でも、これが要注意なのだ。油断すると脱水の危険があるのです。

40 キロ地点の 10 番目のエイドには、我々のサポートクルーがオニギリを準備してくれているはずだ。

そのエイドは、大きなユーカリの木の下にあった。一口大のオニギリ二個頂き、サポートの拍手に送られて直ぐスタート。サポートクルーは 81 キロまで選手に触れることは、禁止されているため、ここでは拍手と会話のみ。

コンビナート地帯を過ぎると左手に紺碧のエーゲ海が静かに横たわっている。

道路と海の間は、別荘が延々と続く。どの別荘も一様に鉄格子で囲まれ、しかも犬がいる表示がついている。やはり、治安が悪いのだろう。

勝手なもので、はじめエーゲ海を見ながら走れる幸せ感を満喫していたのに、小刻みに続くアップダウンにウンザリ。

おまけに暑い。30℃は超えているだろう。

腰に国旗をつけて走っている韓国の選手に追いついた。片言の英語で話す。  
韓国のウルトラランナーは300人くらいで今回は8人がエントリーしていると言う。

## ■第一関門、コリントス

高所恐怖症の私は、高さ80mのコリントス運河にかかった橋を渡るのに足がすくみ、出来るだけ下を見ないようにして渡る。

渡ってすぐ81キロ地点に第1エリミネーションポイント。

サポートクルーの暖かい出迎えを受け、ここではじめてサポートを受けることができる。  
椅子に腰を下ろし、冷たいタオルで顔を拭くと暑さでボーっとした頭がスッキリ。そして、そうめんを頂きながら、膝や大腿のアイシングをしてもらう。

10分ほどの休憩で蘇えり再スタート。次にサポートクルーと会えるのは94キロ地点だ。

81キロの関門は、16時30分。今15時30分だから81キロを8時間30分要したことになる。ほぼキロ6分ペースだ。予定通り1時間の貯金だ。

74ヶ所のエイドステーションは、それぞれ閉鎖時間を持っていて、それをオーバーするとリタイアとなる。

## ■ネメアに向けて

コリントスからは海は見え、両サイドにぶどう畑が続く田舎道。これからペロポネソス半島の中心部に向けて走る。

しばらく走るとスパルタスロン常連の入江さんに追いつく。苦しそうだ。途中で嘔吐したと言う。お腹の具合が良くないようだ。ウェストポーチに入れていた胃酸の分泌をおさえる薬を1カプセル差し上げ、先に行くことにする。

私は医師の処方で、この薬をレースの1週間前から飲み胃酸分泌を抑制した。これは長時間走ることによって血液が足の筋肉に集中し、胃が虚血状態になり粘膜が胃酸でやられるのを防ぐためである。

今回ウェストポーチには、この他腸整剤、下痢止め、鎮痛剤などの薬剤を携帯した。腸整剤は、腸のコントロールより体脂肪の効率的燃焼を目的に、約10キロに10粒を服用しながら走った。

100キロ過ぎると、小野木先生のアドバイス通り歩いている選手が目につく。これは前半飛ばし過ぎのツケなのだ。

だからキロ6分ぐらいで走っても順位は自動的に上がっていく。

113キロのエイドでは、サポートカーに預けておいた長袖のTシャツとロングタイツに着替え夜の寒さに備える。

そして夜、最も重要な懐中電灯を頭につけてスタート。地面に書かれた矢印を見落とさないようにしながら、前のランナーの灯りを目標にひとつずつ順位を上げていく。

前のランナーを抜くのは気分が良い。124キロのネメアでは、1時間30分の貯金となった。我らのサポートクルー特製のうどんを食べ元気を頂戴し闇の中へ走り出す。

## ■サンガスの麓の町、リルケアに向けて

ネメアを出てしばらくすると未舗装道路の緩やかな上りが続く。

上からライトを照らすと凹凸が見にくく時々足を取られそうになるので、ライトを手に持ち替えて走る。

真っ暗な夜道、言葉の通じないない外国人でも黙って抜くのは失礼。せめてスマイルでも。

デンマークから来たと言う29歳の青年と単語を並べるだけの英会話でしばらく並走するが、単語が出尽くして沈黙が続く。

もっといろんなことを話したいのに、話せない。悔しい。

リルケアのエイドは148キロ地点のコーヒーショップの前にあった。ここにはサポートクルーはいないが、熱いコーヒーを飲んでスタート。その時、アクシデント発生！

膝の上に置いていたライトが地面に落下。点灯しない。電池を入れ替えてもダメだ。外灯の下に行っているいろいろやってみるが、全然点かない。ライトがないと外灯一つない真っ暗な道は、走れない。

さて、どうするか？

そこに、先ほど一緒に走ったデンマークの青年が来た。身振り手振りで状況を説明して青年のライトをたよりに一緒に走ってもらうことにする。

154キロのカパレリ村にサポートクルーが待っていた。早速、ライトを見てもらう。点いた！ありがとう。助かった。

デンマークの青年にもお礼をいって、一人夜のサンガスに向かう。

## ■最大の難所、サンガスの山

高速道路のオレンジ色の外灯がサンガス山の中腹を縫うように走っている。いよいよサンガスの登りだ。

ジグザグに登る道路にランナーの灯りが点々と揺れている。ここは、無理せず、歩きを入れながら慎重に歩を進める。

高速道路の下をくぐりしばらく行くと159キロのエイド。ここからは完全な山登り。

ルートを示す蛍光ランプが1200mの頂上まで続き、ランナーはそれに目印に登る。登山道らしきものはない。ガレ場だ。

ライトで照らしながら一步一步踏み締めるように登る。暗くてよく判らないが、山の斜度は30度ぐらいだろう。

滑落したら生命の危険さえ伴う。

2. 3キロ登ってやっと頂上。ここにもエイドが設置されている。

空を見上げると満天の星屑。これが噂に聞いたサンガスの頂上見る星か…。星に見とれている暇はない。その上寒いので給水してすぐネスタニ村に向かって下る。

下りもまたズルズル滑り転びそうになる。とてもじゃないが走って下りるのは困難。

ネスタニ村の広場に172キロのエイドステーションがあった。サポートクルーも待っていた。そこにスパルタスロンを知り尽くした文芸春秋の岡崎さんがサポートを手伝っているではないか。

「岡崎さん、どうしたの？」

「トランクスが擦れ、出血してね。リタイアだよ」

こんな人でもリタイアするのか…。スパルタスロンの厳しさをまざまざと見たような気がした。

サンガスでもたついたので、制限時間の貯金が55分になってしまった。ヤバイ！おじやを掻き込んでそそくさとスタート。

## ■二日目の朝、テゲアに向けて

ネスタニを6時35分に出発。まだ、暗い。

長い一本道が続く。前後にランナーの灯りは全く見えず、コースを示す矢印もなかなか現れない。道を間違ったのではないだろうか…。不安がつゆる。

小野木先生からは「道を間違えると精神的ダメージが大きいから標識を見逃さないように」とアドバイスを受けていたのを思い出す。

やっと約4キロ先に、エイドの灯りが見えた。ホッと一安心。

我々のサポートカーが手を振って追い越して行く。

サポートカーは早い選手と遅い選手を2台の車でサポート。もちろん私は、後方のサポートカーにお世話になる。サポートはランナーズウェルネスの社員の方が中心だが、選手に付き添いで来た人やリタイアした人なども総出でクルーに加わる。

コース沿いの村々のエイドでは、小学生ぐらいの子供たちが手伝っている。屈託のない笑顔が印象的だ。いい顔している。

日本の子供たちにもこんな笑顔がほしいと思うのは私だけだろうか？そんな子供たちとハイタッチを交わしながら走る。

ある村でのこと。子供たちが小さな紙片をくれた。紙には、何やらギリシャ語で書いてあるがサッパリ分からない。ゴミ箱に捨てようと思ったが、思い留まって持ち帰ることにした。

翌日、通訳の人に聞いて「最後まで、今の調子で頑張れ」との意味だと分かった。



195キロ地点、テゲアのエイドは村の中央にあった。

もう、とっくに前を走っているはずの境さんがいた。意外だ。別大マラソンも2回完走、2時間32分の記録を持つスピードランナーだ。

訳を聞くと、サンガスの登りで道を間違っリタイアしたとのこと。彼は過去2回リタイア、今回も涙をのんだ。

いくらスピードがあっても、このスパルタスロンは微笑んでくれないことを、身をもって痛感した。そして、境さんのリタイアを目の当たりにして、完走の不安がまたのしかかって来た。

ここで貯金を1時間3分に戻し、再スタート。

## ■最後の試練、1000mの山越え

テゲアを出ると今度は1000mの山が立ち上がる。

今度は舗装道路だから走り易いが、ダラダラと上りが延々続く。そして暑い。日陰は全くない。エイドでミネラルをボトルでもらい持って走る。飲むより頭や足に掛け方が多い。

強烈に眠たい。足がよろめき路側帯から落ちそうになる。睡魔だ。

200m先に人がいる。エイドだな…。アレ？近づくと誰もいない？あるのは等身大の岩。これが人間に見えたのだ。

そうか、これが噂の幻覚なのか…。でも、こんな状態であと50キロ走れるのか？リタイアが頭をよぎる。

そして、リタイアの理由を探そうとしている。

「睡魔は、時間が経てば去っていく」と小野木先生の言葉を思い出した。

もう少し、頑張ろう！

そんな葛藤を繰り返し睡魔から解放され、202キロのエイドに神奈川の村田さんと到着。

ここが山のピークだ。今、12時。残り40キロを7時間で走れば完走だ。しかも後はスパルタへの下り。

よし！これなら何とかできるだろう。私同様、スパルタスロン初参加の村田さんも納得顔。

223キロのエイドでは、サポートクルーが迎えてくれた。

貯金は1時間20分になった。後23キロを5時間弱で走ればいい訳だ。椅子に腰を下ろすと、24時間テレビで走りながらタレントのサポートをするあの坂本雄次さんからケアを受ける。

少し早いけど完走を確信し「これから、レースを楽しみます」と言うと「足のダメージも少ないようだから、ぜひ、そうして」とのこと。

## ■祝福のパッシングとクラクション

あと10キロ。眼下にスパルタス市が広がる。村田さんと前後しながら、スパルタに向け坂を淡々と下る。

対向車線の車から祝福のパッシングやクラクションが鳴る。その度に、拳を空に突き上げてそれに応える。

スパルタの市民は、このスパルタスロンの歴史と過酷さをよく知っているため240キロ走ってきたランナーを憧憬の念を持って迎えると言う。

今回、スタートからずっとはいた黒のハーフタイツは塩が噴出し、白い模様となっている。

## ■遥かな遠い夢の実現

ゴール1キロ手前からマウンテンバイクに乗った少女がゴールにエスコートしてくれる。

国道を右折し、さらに右折すると直線約500mのビクトリーロード。その奥にレオニダス王の像はある。

市民が沿道やビルのベランダから「ブラボー！」「ブラボー！」と祝福のエールが飛ぶ。

完走した人、リタイアした人も「ナイスラン」と迎えてくれる。いままでこんなに熱い祝福受けて終焉を迎えるのははじめてだ。

リタイアした境さんが差し出した手に握手。



夢にまで見たスパルタスロンのビクトリーロードを今、駆け抜けゴールしようとしている自分が信じられない。ここにいることが遥かな遠い夢だった。いま、その夢の中に自分があるのだ。

レオニダス像の前に立つ。石段を上がる。黒いレオニダス像の左足に静かに両手を置く。

あの歓声が一瞬止まった。そして、すべてが終わった。



スパルタ市長から月桂樹の冠を授かり、ズシリと重い完走メダルを頂く。

古代ギリシャの白装束を身にまとった女性が古代の陶器を模した器にエウロタス川の水を差し出し、労をねぎらってくれた。

#### ■完走は自分ひとりのものにあらず

確かに完走したのは私。しかし、完走させてくれた人たちの存在を忘れてはならない。

不安を払拭し、完走のノウハウをアドバイスしてくれた小野木ドクター、胃酸を抑える薬など処方してくれた永井ドクター、不眠不休で献身的なサポートしてくれたクルー、現地の貴重な情報を教えてくれた同室の境さん、そして練習に付き合ってくれたクラブの仲間、快くギリシャに送り出してくれた家族や職場の仲間。

34時間38分20秒の中にはその支えがギッシリ詰まっているのだ。感動をありがとう！白だろう。酒とは、死ぬまで上手くつき合っていきたいものだ。

## INTERNATIONAL HISTORIC ULTRAMARATHON ATHENS-SPARTA 246 km

## Finishers 2003

Pos	No	Name	Surname	Sex	Country	Time
1	246	MARKUS	THALMANN	M	AUSTRIA	23:28:24
2	248	VALMIR	NUNES	M	BRASIL	25:30:35
3	143	JEAN-JACQUES	MOROS	M	FRANCE	26:26:16
4	167	MASAYUKI	OHTAKI	M	JAPAN	26:27:34
5	92	JURI	MARTIN	M	AUSTRIA	27:22:22
6	194	NOBUMI	IWAMOTO	M	JAPAN	27:23:46
7	160	CHRISTIAN	FATTON	M	SUISSE	28:15:06
8	201	YOSHIO	NISHIMURA	M	JAPAN	28:18:33
9	40	RAMON	ALVAREZ SAINZ	M	SPAIN	28:42:08
10	151	ROLAND	ROUX	M	FRANCE	28:52:08
11	191	AKIKO	SAKAMOTO	F	JAPAN	29:07:44
12	210	SUMIE	INAGAKI	F	JAPAN	29:38:54
13	236	ANDRAS	LOW	M	HUNGARY	30:12:47
14	233	RAUL JAVIER	AMIL	M	ARGENTINA	30:18:26
15	174	KOTARO	MATSUSHITA	M	JAPAN	30:54:11
16	41	JOSE	ALVES COSTAS	M	SPAIN	31:13:31
17	136	ALAIN	LE POLOTEC	M	FRANCE	31:39:19
18	148	THIERRY	POUPARD	M	FRANCE	31:48:22
19	126	PATRICK	DE GEYTER	M	FRANCE	31:48:27
20	80	BARBARA	SZLACHETKA	F	GERMANY	31:50:23
21	32	HERMANN	BOHM	M	GERMANY	31:53:33
22	166	KAZUYOSHI	IKEDA	M	JAPAN	32:04:34
-	132	HUBERT	GAUTRON	M	FRANCE	32:04:34
24	171	MAKOTO	SUZUKI	M	JAPAN	32:09:15
25	34	JAN	ONDRUS	M	CZECH REPUBLIC	32:16:25
26	7	CZESTAW	MACHERZYNSKI	M	POLAND	32:25:14
27	88	TERO	TOYRYLA	M	FINLAND	32:25:46
28	82	MICHAEL	PFEL	M	AUSTRIA	32:34:06
29	139	JEAN-LOUIS	MAJOREL	M	FRANCE	32:39:24
30	5	PETER	FOXALL	M	ENGLAND	32:49:16
31	106	HUBERT	KARL	M	GERMANY	32:51:06
32	98	BYEONG SOON	KIM	M	KOREA	32:52:26
33	175	KIMIE	NOTO (FUNADA)	F	JAPAN	33:01:04
34	145	STEPHANE	PELLISSIER	M	FRANCE	33:01:35
-	77	THOMAS	KABUSS	M	GERMANY	33:01:35
36	52	REIMAR	PROELL	M	AUSTRIA	33:10:17

37	243	GERHARD	EGGENREICH	M	AUSTRIA	33:15:50
38	141	STEPHANE	MATHIEU	M	FRANCE	33:22:44
39	31	NORBERT	MILLNER	M	AUSTRIA	33:25:05
40	103	TAZ KEUN	PARK	M	KOREA	33:28:57
41	15	JURGEN	HOFMANN	M	GERMANY	33:32:36
42	43	PHILIP	VERDONCK	M	BELGIUM	33:46:45
43	198	ISAO	SAITO	M	JAPAN	34:02:31
44	226	WOJCIECH	PISMENKO	M	POLAND	34:05:18
-	227	PADUCH	PIOTR	M	POLAND	34:05:18
46	178	MASAJI	FUKUYA	M	JAPAN	34:10:17
47	155	CLAUDE	VILQUIN	M	FRANCE	34:15:56
48	161	TETSUO	IRIE	M	JAPAN	34:16:20
49	70	LARS-UFFE	HANSEN	M	DENMARK	34:17:20
50	146	ANTOINE	PIERSON	M	FRANCE	34:22:21
51	183	NOBUYUKI	NAKAMURA	M	JAPAN	34:24:53
52	105	KENNY	WALLSTROM	M	SWEDEN	34:25:35
53	199	TOMOKI	NAKANO	M	JAPAN	34:31:49
54	241	TERUO	MURATA	M	JAPAN	34:32:45
<b>55</b>	<b>170</b>	<b>TAKIO</b>	<b>FUKAMI</b>	<b>M</b>	<b>JAPAN</b>	<b>34:38:20</b>
56	56	ALEXANDER	FALKOV	M	RUSSIA	34:39:29
57	208	RYOICHI	SATO	M	JAPAN	34:43:51
58	200	TATSUMI	MIKADO	M	JAPAN	35:03:50
59	138	BERNARD	LLAGONNE	M	FRANCE	35:14:17
60	26	STEFAN	MAIR	M	AUSTRIA	35:14:28
61	185	HIDEO	KUWANO	M	JAPAN	35:20:12
62	53	OTTO	PEISCHL	M	AUSTRIA	35:27:54
63	67	KENT	MOLLER	M	DENMARK	35:28:22
64	176	TOSHIRO	KANO	M	JAPAN	35:29:19
65	89	PETRI	LIETZEN	M	FINLAND	35:31:09
66	73	RADI	MILEV	M	BULGARIA	35:34:17
67	85	MAIK	DIEROFF	M	GERMANY	35:35:34
-	84	REGINA	BERGER-SCHMITT	F	GERMANY	35:35:34
-	78	HEIKE	PAWZIK	F	GERMANY	35:35:34
-	86	MARKUS	FISCHER	M	GERMANY	35:35:34
71	144	GILLES	PALLARUELO	M	FRANCE	35:35:53
72	79	HERBERT	BRITZ	M	GERMANY	35:46:32
73	214	EIJI	KOMURO	M	JAPAN	35:46:45
74	193	KAZUYA	INOUE	M	JAPAN	35:47:02
75	8	IMRE	PEK	M	HUNGARY	35:47:38
76	130	THIERRY	FOUCAUD	M	FRANCE	35:47:58
77	206	TOSHIYUKI	HAYASHI	M	JAPAN	35:48:01
78	162	HIDEHISA	IMAI	M	JAPAN	35:49:37

79	184	TAKASHI	NIKAIDO	M	JAPAN	35:49:51
80	51	HUNCOVSKY	MARTI	M	CZECH REPUBLIC	35:50:35
81	71	STEVE	BENJAMIN	M	USA	35:58:44
82	197	TOMOTAKA	KAMEI	M	JAPAN	35:59:01
83	196	HIROYUKI	NISHIMURA	M	JAPAN	35:59:04
84	101	HWEI	KIM	M	KOREA	35:59:55